

目的 今日個人の尊重意識の高まりは、家族関係を大きく変化させている。法制審議会の「民法の一部を改正する法律案要綱案」(’95.1.16)における選択的夫婦別姓は多くの支持を集め、さらには死後まで家に縛られたくないという女性たちの個人墓・合祀墓も増加するなど、従来の家制度・家意識は根底から揺るがされている。しかし、一方で墓に詣でる家族の意識は、変化しつつも家制度をひきづり、そこには男女差別の認識すら現れる。そこで、本報告では、墓に詣でる時、あるいは位牌に手を合わせる時に人は誰を思い浮かべるのかといった点に焦点をあて、その背景にある先祖意識を明らかにすることを目的とする。さらには、今日の家族の置かれている状況を先祖意識の分析を通して再考察していきたい。

方法 ①墓の成立、墓の形態変化の歴史を明らかにする。②先祖意識の聞き取り調査(350人)結果の分析をする。以上の二つの作業を通して、今日、我々の持つ先祖意識と家族関係の変化、ジェンダー・エクィティのありかたを明らかにする。

結果 今日の家墓・「〇〇家の墓」の形態は、高度経済成長期以後に広まったもので古くからのものではない。「先祖とは？」の回答分析から①育った家族形態が大家族と核家族では先祖認識に差がある。②先祖として挙げるのは父方の祖父が多い。③長期婚姻・大家族の夫婦についてみると、夫は自分の祖先のみを先祖として認識し、妻は夫(婚家)の先祖を自らの先祖として認識する。④核家族で育った者は具体的な人物ではなく漠然としたイメージを示すなど、家族形態の影響と男性の優位性が明らかになった。